

初期 社会主義研究

第21号

初期社会主義研究の新展開

梅森直之 田中ひかる 黒川伊織 大橋秀子
山泉 進 大澤正道 大和田茂 竹田行之



創刊号表紙

〈追悼〉

西川正雄 (M. H. シュプロッテ) 遠藤斌 (小松隆二)

『初期社会主義研究』総目次 (創刊号—第20号)・執筆者索引

初期社会主義研究会

〈追悼〉

西川正雄氏 (一九三三—二〇〇八) についての私的回想

マイク・ヘンドリック・シュプロッテ

田中ひかる訳

二〇〇八年一月のある火曜日、日本からの電話での知らせに私は声を失った。西川正雄教授が亡くなった、という悲しい知らせだったからである。

このたび、西川正雄教授にまつわる思い出を寄稿してもらいたいという依頼があったので、私は謹んでお引き受けすることにしました。

西川氏は、私が研究者としての道を歩み始めてから出会ったなかで、歴史家としても、さらには一人の人間としても、私に大きな影響を与えた数少ない人物だからである。

西川教授と最初に出会ったのは、今から一〇年以上前の

ことで、一九九〇年代半ばごろのことだった。その時から私は「第一次世界大戦と社会主義者たち」の翻訳に取り組むことになる。

ただし、当初、同書のドイツ語訳は、別の研究者によってなされることになっていた。諸般の事情でこの計画が頓挫した後、当時ボン大学で日本の初期社会主義についての研究を修士論文としてまとめようとしていたこと、そして、翻訳ができる十分な語学力がある、という理由で、私に声がかかったのである。

翻訳について話があったときには、一九二〇年代以前の

ヨーロッパの社会主義に関する日本語の本をドイツ語に翻訳できないだろうか、という問い合わせだった。当時は就職についての見通しがまだあまり明確ではなかったのも、私は翻訳の仕事喜んで引き受けた。

その後、私はベルリンで初めて西川教授と会うことになった。その日は週末で雨が降っていた。場所はウンター・デン・リンデンに面した大変美しいホテルだった。近くのイタリアレストランに場所をかえて、日本語とドイツ語を交互に交えながらだったが、我々の会話は弾み、とても楽しい午後のひとつになった。また、西川教授が私を驚かした最初の出来事が起きたのも、このレストランであった。ドイツでは、親しい間柄でよくお互いに相手を知っている場合は、「ドゥー・デー」(「お前/君」)というややぞんざいな言葉で呼びあう。他方、自分が尊敬する相手で、しかもお互いに相手のことをよく知らない場合、「ズイー・シー」(「あなた」)という敬称で呼び合う。

私たちは、このベルリンの歴史ある場所で話をしていた。やがて西川教授が一九六八年の学生運動の話をされ、ベルリンではルーディー・ドゥチュケが運動を主導し、学生運動は、ドイツの大学で教授たちと学生たちとの上下関係を崩すという結果をもたらした、ということの説明された。

そして西川教授は、「では、私たちもドゥーで話しませんか」と私に提案されたのである。

私の年齢では、一九六八年以降、本当に学生や教授たちの間で「お前」で呼び合う、という態度が一般的だったのかどうかはわからない。

いずれにせよ、私の学生生活のなかで、またそれ以降においても、西川教授は、「ドゥー」で話しましよう、と私に提案してくださいました数少ない研究者の一人であることは確かである。

この日以降、私にとっては大変刺激的かつやりのある翻訳の共同作業が始まった。そして、一九九九年、『第一次世界大戦と社会主義者たち』はドイツ語で出版されることになる。

同書の原書は、日本語の本としては比較的ページ数が少ないものであったから、翻訳にはそれほど時間はかからないと思っていたが、結局、翻訳作業は、当初の見込みよりもずっと多くの日数を要すことになった。それは同書が、ドイツ語、英語、フランス語、ロシア語、ポーランド語、オランダ語、そして日本語という複数の言語による史料に関する徹底的な調査の成果であるためである。一度でも文書館で調査をした経験がある者なら、史料調

査だけでもどれほど膨大な時間がかかるのか類推できるはずである。それゆえ、本書で引用される史料が膨大かつ多岐にわたっていることに圧倒された。史料は、国際社会主義者会議(つまり、第二インターナショナル)の議事録から始まって、指導的な社会主義者たちの回想録、さらにはローザ・ルクセンブルクの往復書簡に至るまで多岐にわたっていた。このローザ・ルクセンブルクとは、西川教授はご自分の研究において、とくに深いつながりを感じていたようである。

本文中に直接引用されている史料の多くは、世界各地の文書館にばらばらに保存されているため、まとまったかたちで入手できないもののはずであるが、ところが西川教授はご自分が集めたそれらの史料のコピーを持っていた。したがってかれは、当時は郵送かファックスかのどちらかしかなかったが、そういった貴重な史料のコピーを訳者である私にその都度送付してくださった。そのおかげで、私は翻訳している箇所でも引用されている史料の原典をすぐに見ることができ、その結果、翻訳の時間を短縮することができた。このようにして、翻訳作業が進展している間、私と西川教授は常に連絡を取り合っていた。

このようなやりとりがあったため、『第一次世界大戦と

社会主義者たち』のドイツ語版に関する数少ない書評で、

西川教授の著作が学術的に極めて高い水準にあるという評論を読んだときには、私はとてもうれしかったのである。

幸い、ドイツ語訳が刊行された後も、西川教授との連絡が絶えることはなかった。博士論文を作成していた時、私はドイツ・日本研究所の奨学生として東京に滞在した。その際に西川教授は、三鷹に所有していた外国人研究者用マンションを私に提供してくださった。この滞在中に、また数年後に専修大学客員研究員として招致していただいたときも、私は何度も西川教授ご夫妻と一緒する機会に恵まれた。とてもリラックスした雰囲気の中で西川教授ご夫妻と交わした会話の数々が、今でも忘れがたい思い出である。

また、私が博士論文^③を作成する過程でも、私は西川教授からさまざまな支援を得た。かれは、私と同じテーマを研究している多くの日本人研究者と私を引き合わせ、また重要な論文や書物についても多くの示唆を与えてくれたのである。

さらに、その後、私は博士論文や『第一次世界大戦と社会主義者たち』の翻訳を含む研究成果が認められたおかげで研究者として評価され、二〇〇一年から二〇〇八年まで

ハイデルベルク大学日本学研究所助教授の職を得ることができた。

西川教授の日本語で書かれた刊行物については、日本の研究者の方々がその功績を評価すると思われるので、ここでは西川教授がドイツ語で編纂された論文集についてとくに触れておきたい。

私はハイデルベルク大学で担当した日本史の講義やゼミナール等において、西川教授が宮地正人教授と共同で編纂した戦間期の日本に関するドイツ語の論文集を取り上げた。学生たちは、同書で提示されているさまざまな議論の検討に意欲的に取り組んだ。

日本の一九二七年から一九四五年までの一時期に見られた状況を「ファシズム」と呼ぶか否かという問題は、とくに、その時代の日本を日本史以外の文脈のなかに位置づける場合は、いまだに学術的な論争の対象となっている。

先述した論文集は、このテーマに関する日本人研究者の論文をドイツ語訳したものによって構成されている。したがって、同書は、日本語が読めないドイツの歴史研究者と日本の日本史研究者が活発に議論を交わすことを可能にしたという意味で、国際的な学術交流に重要な貢献をした書物だと言える。

教授は私に対して、留学先がドイツではなくアメリカだったのは何とも幸運な運命だった、というお話を何度か感慨深げにされていた。

このようなかたちで明かされた心情には、西川教授に特有の明確かつ政治的な見解が反映されており、また、そういったかれの心情は、その時々時代の流れにおもねる他の歴史家たちによって表明される見解とは一線を画するものであった。そこで、そういったかれの態度に関わる、私が強い感銘を受けた西川教授の学術的な活動についても述べておきたいと思う。

本稿は、西川教授が学者として担った数々の重要な役割について一つひとつ数え上げていく場ではない。だが、いわゆる「新しい歴史教科書をつくる会」に対して、国際的に著名な歴史家たちの協力を得て共同声明を発表したというかれの行動については言及しておくべきだろう。

さらに、こういった、歴史教科書に関するかれの行動に言及するのであれば、西川教授が歴史家であることに加え、とても熱心な教育者でもあったということについても想起せざるをえない。かれは歴史教育を極めて重要な課題として捉えていた。そのことは、西川教授が、賛同者たちとともに、ドイツとポーランド、あるいはドイツとフラン

西川教授の生涯もまた、かれが対象としていた数々の歴史的事象と同様、歴史がもたらした思わぬ偶然によって定められていった感がある。

かれは、一九五〇年代終わりの安保闘争の真ん中にアメリカに留学している。ただし、アメリカに留学をすることを決めたのは、当時の為替レートではヨーロッパでの滞在費が極めて高額になってしまったため、ヨーロッパへの留学がほぼ不可能だった、という理由からだったという。

このようなかたちで留学先を変更されたことによって、西川教授は、その後かれの師となるゲオルク・W・F・ハルガルテン氏に出会うことになる。そしてこの出会いは、西川教授がその後進める研究を決定づけた。トーマス・マソンと密接な係わりを持っていたハルガルテン氏は、欧州だけでなく、東アジアにおける帝國主義研究も展開させており、これが、西川氏の研究において重要な位置を占めることになるのである。

ヴェルナー・コンツェエやテオドル・シーダーのような、敗戦直後からドイツの歴史学を担った歴史研究者たちが、実は戦前からナチスと何らかの関わりを持っていた、という点について、近年、ドイツの若い歴史家たちがかれらを厳しく批判した。このような事態について言及し、西川

スの教科書対話を模範にして韓国の歴史家たちとの学術的対話を実践した点に見られる。

今日、日本では、社会民主主義が政治的な勢力としてはほぼ完全に意味を失ったかに見える。だが、それにもかかわらず、西川教授が発表した最後の著作の序文を読めば、かれが社会主義の崩壊によって生み出された悲観論に与せず、今もってフランス革命の成果である自由・平等・博愛という理念が持つ社会政策上の意義を、二一世紀のグローバル化の過程においてもなお信じていた、ということがわかる。

私たちは西川教授という得難い対話のパートナーを失ってしまった。評論家のヨハネス・グロスのエピソードによると、イタリアの昔の軍事演習では、礼式の点呼のときに戦死した戦友の名前も敬意を表して呼ばれていた。そしてそれに対して中隊全員で「Present! (ここにいます)」と返答していたのである。

「西川正雄教授」と呼ばれれば、私は「Present!」と答えるであろう。西川正雄教授はいなくなったのではなく、今も我々のなかにいるのだ、と私は確信している。

